

ケニアでの暮らしも落ち着いてきた頃、「アフリカの国境ってどうなっているんだろう？」とふと思いついて、仕事が休みの日に行けるお気軽な距離の国境の町をガイドブックを片手に探していた。

ケニアとタンザニアの国境に住んでいるマサイ族は、牛に草を食べさせるため日々国境を自由に行き来していると聞いたことがあり、興味があった。一緒に働いていたマサイ族の女の子が「ナマンガはどう？ナイロビからだ近いよ」と勧めてくれる。アフリカ人の「近いよ」という言葉をあまり信じてない私。しかも彼女は長距離を毎日歩くマサイの人だ。「近いってどれくらい？」「車で2時間くらいかな」それなら近そうだと訪ねてみることにした。

小型のバス「マツ」は、ナイロビまで行かなくても私が住んでいるところから出ていた。「ナマンガ行き」「80シリング」と繰り返すマカンガ(スワヒリ語で車掌さん)の声がして乗り込んだ。一時間ほどしてバスが乗客で一杯になり出発。周りを見回して驚いた。私以外は、マサイの人々だったからだ。15人くらいで、しかも女性ばかりだった。手には一様にポリタンクを持っている。聞けば、牛乳を売りにここに来ているとのこと。マサイの女性たちは、周辺の村から、早朝牛乳を売りに私などが住んでいた町に行商に来ていたのだ。そういえば、コップやビニールの袋を持って牛乳を買い求める人々の行列を見かけたことがあった。

テレビでみたように真っ赤な衣装とカラフルなビーズのイヤリングが大きく開けた耳にぶら下がっていた。そして、近くにいると家畜特有のにおいが体から伝わってくる。ジーンズにTシャツ、リュックサックにスニーカーの観光客の私。伝統的な彼らの前で、文化をもっていないかのような自分の姿は少し恥ずかしかった。彼女たちは、英語をあまり話せない。外国人の私にケニア国内の公用語であるスワヒリ語で話しかけてくる。その明るさ、屈託のない笑顔。私たちを乗せたバスは、終始歌声と笑い声が耐えなかった。言葉もあまり通じない、文化も環境も全く違う私たちを乗せたバスは、どんどん何も無いサバンナを進んでいく。途中でいくつかの集落でマサイの女性たちを拾ったり落としたりしながら。当然駅の名前などなく、みんな家の前に来たら運転手に合図して降りて行くだけだ。サバンナを100キロ以上で走る車。



ケニアとタンザニアの国境に立つ

2時間もすると国境の町「ナマンガ(Namanga)」に到着した。

タンザニアへと続く「国境」しかない町。観光地であるアンボセリ国立公園へ行く通過点ということもあり、人々が通過していく町。人や物が行きかう活気のある様子を想像していた私は、しーんと、がらーんとしている町の様子に拍子抜けした気持ちになった。マサイの人々の住む町は、国境によってケニア側とタンザニア側に分けられているが、国境を表すフェンスがないところに行くと人々は自由に行き来している。私には彼らがタンザニア人なのかケニア人なのか分からない。国籍を聞いてみると、「そんなのは重要なことではない。重要なことは、牛の食べる草があるということ」と言っていた。彼らの財産でもある何十頭、何百頭の牛は草を求めて移動する。そこに国境がたまたまある、だけのこと。

私のパスポートに押された出入国のスタンプ。タンザニアに入国するために払ったお金。すべてが人工的なものを感じられる。ここは観光資源があるわけでもないので、国境を過ぎると何も無い。安宿や食堂が数えられるほどあるだけだ。

しかし、独立後資本主義の自由主義経済を採用してきたケニアと、タンザニア独自の社会主義を一定期間買い

てきたタンザニアでは、いろいろな違いがこの小さな場所にも存在していた。ケニア側にいるマサイの人々は、手作りのアクセサリーを売っていたり、両替商が「タンザニアシリングあるよ。レートいいよ」と営業してきたり、「今日の宿決まっていますか？」とビジネスをしている人が沢山いるのに対して、国境を過ぎタンザニアに入ると、何も無いのだ。

人も寄ってこないし、店も少ない。しかし一番の違いは、人。聞こえてくるスワヒリ語もなんとなく優しい。店に入って食事をした。メニューもなく、人もまばらな食堂。「魚があるよ」というだけ。飲み物も、タンザニア製のソーダ。ケニアではどこでもあるコーラやSpriteはない。水道もなく、洗面器に入れた水で手を洗う。30分くらい待ってようやく魚料理が出てきた。「遅くなってごめんね」と優しい笑顔と声。

ケニア人から謝罪の言葉をほとんど聞いたことなかった私は、スワヒリ語でごめんなさいは、samahani(サマハーニ)ということを知った。タンザニアの人は、英語を知っているのだろうけど、あまり話しながらない。スワヒリ語もケニアの人々に比べると、ゆっくりで優しい。両替をしたばかりで上手くお金が払えない私は、もたもたしていると、時間をかけて説明してくれる。おつりもきちんとくれる。

市場にもよってみた。がらーんとして活気がない。ケニアにはない野菜や果物もあり、一軒一軒のぞいてみる。お客もそんなにいない市場では、私のつたないスワヒリ語でもいろいろ話が聞けた。野菜のこと、暮らしのこと、子供のこと、ゆっくりした時間、空気が流れていた。今までケニアにいて、少しはアフリカのこと知った気になっていたような感じがしていた。しかしたった数時間で違うアフリカがあった。アフリカ人は国、民族でみんな違う。国民性、民族性があるのだ。

夜になって、宿を探す。選択肢は2, 3軒。昼間にケニア側にあった宿も見えていたので違いに驚いた。ケニア側には英国式のB&Bのような建物で、電気、水道があり、不便さはない。しかし、タンザニア側の宿は、一番いいところでも電気、水道はない。値段は、一泊1000円もしないが、トイレ・シャワーは共同で、快適に観光を楽しむ



巨大なアリ塚にビックリ



タンザワ側は何もない

というわけにはいかない。ベットしかない部屋の天井からは蚊帳がぶら下がっていた。机にはスワヒリ語で書かれている聖書。

夜、食堂へ行ってみると発電機によって電気がついてはいたが、一箇所のみを照らしているだけで、外は闇が迫っているのがわかる。頼んだ料理が、1時間くらいかかって出てくる間、食堂の前には車がどんどん乗り付けられてくる。夜が深まるにつれその台数は増えてくる。そして車から降りてくる人々はスーツを着て、携帯を片手に忙しそうにケニア人のビジネスマン。タンザニアが社会主義だった頃から、ブラックマーケットへ電化製品や食料品を流していたと言う。夜になるとそういう表情もこの町にはあるようだった。食堂ではアフリカの音楽がかかり、私も踊りの輪に入り、タンザニアの平和な夜を楽しんだ。

朝になり、宿を出てタンザニア側を歩き出した。ロバがゆっくり歩き、遠くにはキリマンジャロだろうか、ととても高く高い山がうっすら見える。大きな蟻塚が無数に存在し、木には鳥の巣が沢山ぶら下がっている。しーんと静まり返る大地の中を、いつものようにマサイの人々が牛の赴くまま歩き、国境を越えていく。

私がこの町を訪ねたことを証明するものは、NAMANGAと書かれた看板の前で撮った写真一枚だけだ。しかもそれ以外は、遠く首都まで延びた道が続いているだけだ。

アフリカの国境の町ナマンガで、「国境」について考えた週末だった。
